

博士論文（要約）

夏目漱石の小説における記憶の政治学  
—新聞連載小説の読者の視座から—

郭 東 坤

# 夏目漱石の小説における記憶の政治学

—新聞連載小説の読者の視座から—

郭 東 坤

夏目漱石は、一九〇七年に東京朝日新聞社に入社して以来、『虞美人草』から始め、『坑夫』、『夢十夜』、『三四郎』、『それから』、『門』、『彼岸過迄』、『行人』、『心』、『道草』と『明暗』に至るすべての小説を『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に同時連載した新聞小説作家であった。その意味で『虞美人草』以来のすべての漱石の小説は、単行本の読者に読まれる前に、新聞紙面における連載で読者に読まれたのである。したがって、これらの漱石の小説を読んだ最初の読者は、毎朝手にする新聞紙面で、連載小説という形で漱石の小説を読んだ読者だと言えるだろう。だが、これまでの漱石研究は、作家論や作品論さらにはテキスト論を問わず、ほとんど例外なく単行本の形で漱石の小説を分析してきた。本論文は、漱石の小説を新聞紙面で連載小説を読む読者の立場を想定し、漱石の小説がどのような意味作用を形成させたのかを明らかにしていきたい。毎日の新聞紙面で新聞小説を読んでいく際の読者の記憶の中に蓄積する多様な新聞小説以外の情報が、どのように思い起こされてコンテキストとして活性化し、小説テキストとの相互作用の中で意味生成を起こすのかを分析的に明らかにするのが、本論文の全体としての試みの中心となる。

漱石の新聞連載小説に導入された新聞の読者の位置は、これまでの漱石についての先行研究の中で「時事性」として言及されてきたものと深く関わっている。先行論では、漱石の新聞連載小説は「読者の問題意識を作品世界へと引き寄せる時事性」（吉田俊雄「新聞小説」『別冊夏目漱石事典』一九九〇年）を持ち合わせていると言われてきた。このような「時事性」は、漱石の連載小説の中に登場する同時代の出来事から極めて多くの事例を確認することができよう。東京勧業博覧会、出歯亀事件と塩原事件、日露戦後の不況、東京高商の学校騒動、『煤烟』の連載、日糖事件、警視庁の探偵による幸徳秋水の監視、韓国人独立運動家安重根による元韓国統監伊藤博文暗殺、南洋冒険家児玉音松の死、大逆事件後の高等遊民問題、明治天皇の死と大喪、そして大喪当日の朝の乃木希典の殉死などがそれである。新聞連載小説についての従来の先行研究は、「連載小説と、掲載紙の他の記事、論説や時事的な記事との間で新たな意味が生み出される可能性」（和田敦彦『読書の歴史を問う—書物と読者の近代』笠間書房、二〇一四年）があると指摘はしつつも、その「可能性」をテキスト分析のレベルから排除してきた。漱石の新聞連載小説における「時事性」に注目する本論文は、まず、以上に列挙した同時代の出来事が、漱石の小説が連載された新聞紙面における他の記事の中で報じられていたことに注目する。

だが、新聞連載小説を読む読者は、同紙面における報道記事を同時に読む読者でもある。ベネディクト・アンダーソンは、近代の国民国家が「想像の共同体」だと主張しながら、新聞がその「想像」を可能にするメディアであると述べる。「一日だけのベストセラー」と言ってもいい新聞は、毎朝、数多いその読者共同体によって「ほとんどまったく同時に消費」される「儀式」を創出した。こうした「沈黙の聖餐式コミュニオンに参加する人々は、それぞれ、彼の行っているセレモニーが、数千（あるいは数百万）の人々、その存在については揺るぎない自信をもっていて

も、それは一体それがどんな人々であるかについてはまったく知らない、そういう人々によって、同時に模写されていること」が「想像」できるのだ。そして「新聞の読者は、彼の新聞と寸分違わぬ複製が、地下鉄や、床屋や、隣近所で消費されるのを見て、想像世界が日常生活に目にみえるかたちで根ざしていることを絶えず保証」される（ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房早山、二〇〇七年）。さらに他の新聞も読者が手にしているものと大同小異な内容を報道していることを考慮すれば、読者は新聞を読む自分の行為が国民的な規模において毎日反復的に行われていることを認めざるを得ない。

だとすれば、漱石の新聞連載小説は、すでに国民共同体を想像的に立ち上げる日々の儀式の中で読者に読まれていたと言える。だがここで、紙面における報道や社説などが、読者を国民共同体の一人として想定して語りかけていたことを見逃すべきではない。もちろん、普段の記事の文中にその宛先が現れることは殆んどない。だがいざとなれば、「苟も日本に生れて都近う住めらん限りの者は何事を措いても請ふ！行け！行いて二重橋の畔皇上いたつきに悩ませ給ふ邊に至れ、己が形の己が居る所に従ひて移行く様をひし／＼と思ひ当るべし（略）是れ国民を導くべき最好の実物教育にあらずんばあらひ」（「二重橋に行け」『東京朝日新聞』一九一二年七月二八日付）と言ったような明治天皇の「御不例」のときに天機奉仕を勧める記事のように、読者を国民と捉えて語りかける。その意味で新聞の読者は、つねに、国民として呼び掛けられる用意ができていた者だと言っても好い。本論文は、漱石の連載小説が国民共同体を想像的に立ち上げる場としての、新聞紙面に連載されていたことの政治的な意味を問う。新聞紙面における報道記事を読むことによって、みずから国民共同体を想像しながらそこに同一化する読者に向けて、漱石の連載小説はどのように働き掛けていたのだろうか。

そのために本論文では、漱石の連載小説内部の時間が、ある場合には新聞を読む読者の時間と同じように設定されていたり、またある場合には数か月後、或いは数年後として設定されている点に注目する。このような時間のずれによって、新聞連載で漱石の小説を読む読者は、新聞紙面で同時代の出来事の報道記事を読んだ数か月前の記憶を思い起こすことになる。すなわち漱石の新聞連載小説は、数か月前に紙面に報じられた出来事の記憶を読者に想起させ、物語の中で改めて考えさせるように仕掛けられているのだ。漱石の連載小説がもつこのような時間的な仕組みを、文学テキストの分析として実践して見せたのは、『門』をめぐる小森陽一、内藤千珠子、五味淵典嗣の共同研究である。『門』が、「新聞記事の言説に対して、きわめて意識的な自己言及性」を保持している「メタ新聞記事小説」だと指摘した小森は、「ほぼ4ヶ月前の新聞記事の言説を読者に想起させる」『門』が「読者の多くが忘却してしまったかも知れない過去の出来事をめぐる情報を介入させ、忘却を押しとどめる」「記憶をめぐる闘争の場」にもなると指摘している（「新聞のディスコース分析—新聞小説『門』を媒介にして」『社会の言語態』東京大学出版会、二〇〇二年）。従って漱石の新聞連載小説は、同時代の出来事をめぐる記憶の政治学を新聞読者に迫る場でもあったのである。

見逃してはならないのは、漱石の新聞連載小説に登場する人物の多くが実は新聞読者であり、その人物が新聞を読むことによって、過去の出来事の報道記事が現実の読者に想起される設定となっていることである。その場合、現実の読者は、虚構の小説世界の中で、かねて自分が読

んだのと同じ報道記事を読む登場人物に対して共感を覚えたり、違和感を覚えたりするだろう。あるいは小説世界における読者の読み方に虚を突かれることもあるだろう。すなわち小説の虚構世界で報道記事を読む登場人物の態度に同一化や差異化を繰り返すことで、読者は自分の態度を決め、その後の登場人物をめぐる物語の展開の中で、既存の態度を変えるように迫られる。その意味で漱石の連載小説は、同時代の出来事を報じた記事を読むことで形成された、読者の記憶と意識の在り方に介入していると言える。

本論文では、漱石の新聞連載小説における時事性をあらわす歴史的な出来事とその新聞報道が新聞連載小説の中で喚起されることに注目し、読者の意識において形成される記憶の政治学を浮き彫りにしたい。本論文での考察を通じて、漱石という〈作家〉の発言や態度から形成される漱石像を超え、その新聞連載小説が新聞の読者に受容される過程で、どのような記憶の想起を通じてどのような意味作用が起こるのかを具体的に見ることができるようになろう。実際に本論文での考察は、従来の単行本のテキストを対象に分析を行った先行研究が見逃してきた多くの歴史的な出来事を、漱石の小説が新聞読者に想起させるコンテキストとして特定し、意味論的な場に繰り込んでいる。もちろん漱石のテキストが未来の読者に開かれていないわけではまったくないが、このような考察を通じて漱石の連載小説が読者にどのような記憶を想起させ、その意識と無意識の在り方に働き掛けているのかを具体的に確かめて行きたい。

第一章で取り上げた『三四郎』は、美禰子が三四郎の眼から男を「愚弄」する女として捉えられ、広田の批評の言葉で批判され、原口の画の中に捕獲されていく物語である。新聞連載でこの小説を読む読者は、このような物語がわずか半年前の新聞紙面に報道された、森田草平と平塚明子の心中事件である塩原事件の報道を象っていることがはっきり分かる。当時の新聞紙面におけるスキャンダラスな関心の的であった平塚明子は、いわば「男を翻弄」或いは「愚弄」する女として報道されていたからである。小説の中で美禰子を現実の平塚明子に同一視することができないが、『三四郎』が現実の報道記事から「愚弄」というテーマを持ってきたのは否定し難い。

『三四郎』における三四郎の視点に死角があるのは、研究史における支配的な考え方である。本論文で指摘したのは、そのような死角の中において生じる意味作用が、作中における金の流れに即した形で美禰子の現在の状況を物語らせていることである。美禰子は里見家の戸主恭介から分与された財産の中で三〇円を三四郎に貸す形で、野々宮が広田の引っ越し資金不足のために貸した二〇円を与次郎が競馬ですってしまい、不足分を三四郎から借りたという借金の流れに介入する。美禰子の財産は、もし美禰子が見合結婚をするならば、民法の規定により夫に帰属する単なる持参金となる何ら使用価値もない金である。美禰子が三四郎に必要な二〇円より多い三〇円を貸したのは、そこに交換価値よりも高い使用価値を見出したからであろう。

見合ではなく恋愛結婚すれば、美禰子の金はその使用価値を発揮できるだろう。しかし交際相手である野々宮は結婚に踏み切ってくれず、せっかく拵えた一軒家を畳んで下宿生活に戻ってしまう。三四郎に三〇円を貸したついでに立ち寄った上野の展覧会で、美禰子は野々宮に会い、その前で三四郎の耳に何か囁くふりをする。三四郎の耳には何も聞こえて呉れないのは、実のメッセージが野々宮に向けられているからであり、その意味で金も交際相手としての野々宮に渡されるべきであったと言えるだろう。要するに、美禰子には野々宮との結婚するために、

彼が必要とする金額より多くの金を使う意思がある。すなわち『三四郎』は、美禰子の使いたかった金が使われずに、見合結婚の持参金となってしまふ物語なのだ。

一方、美禰子から三〇円を貸した意味が分からない三四郎は、母から送られた金でそれを返してしまう。美禰子の意思で使われたその金は、見合結婚で自分自身を合わせた交換価値である持参金から切り離されて使用されたものである。たとえ返されたしたところで、その金は見合結婚での交換価値となり、将来には民法に即してその夫の管理になるだけである。それなのに、美禰子が結婚するという話を聞いた三四郎は、故郷の母を金を送らせてそれを決済してしまう。金の流れに美禰子が介入した意味に全く気付かない三四郎は、結果的に言えば美禰子を「愚弄」してしまっていると言える。その意味で三四郎の死角で立ち上がる金の流れをめぐる意味作用は、新聞紙面の報道言説での「愚弄」の意味を大きく変えていたと言える。

第二章では、『それから』が『東京朝日新聞』の三面で「実業家廻り」という連載記事と共に連載されていたことに注目した。「実業家廻り」の内容には、日糖事件で失墜した資本階級の名譽を言説的に取り戻すために企画された意図が露骨に現れている。連載に登場した実業家たちは、みずからが関わる企業の利益追求行為を国家のための行為として正当化しに掛かる。本論文で注目したのは、資本階級の自己正当化論理でもあるこうした言説が、同紙の三面に連載されている『それから』に登場する資本家長井得のそれと極めて似ていることである。特に作中に描かれた長井得は、「実業家廻り」にも登場する大倉喜八郎を彷彿させる人物であった。従って、代助による父得への批判は、新聞読者には「実業家廻り」に登場する大倉を始めとした資本階級の人たちへの批判として聞こえてしまいかねない。

長井家の次代の戸主である誠吾が率いるその企業は、代議士を買収して精製糖市場を独占しようとした大日本製糖を彷彿させる。現実より五か月ほど前に設定されている『それから』の中に登場する新聞には日糖事件が大々的に報道されているが、作中の経済部主任記者平岡は、日糖の次になり得る会社として長井家の企業を指さす。その意味で誠吾は得の次世代の実業家であるわけだが、代助が誠吾を批判しないのには注意する必要がある。現在の意識の対象となるのが次に来る対象の方便になってはならないという論理を持つ代助に、国家の為に金を儲けると言う得は奇妙に見えるものの、金を儲けるのは何かの目的の為の方便としない誠吾は、むしろその論理に合致する人間に見えたのだ。その意味で代助の論理は、資本階級への批判となっているどころか、むしろ無目的に自己拡張する独占資本の論理を強化していると言えよう。

重要なのは、目的と方便をめぐる代助の論理が、三千代を忘却するために作り上げられた意識の邪術にすぎないことである。政略結婚を行う資本階級の男としてそれにふさわしくない三千代を見捨てた代助は、自分の意識の潜在領域から蘇ってくる三千代にまつわる記憶を抑圧するために、現在の意識の焦点だけに止まらない意識は方便と化した意識、墮落した意識だという奇妙な論理を作り、それを以て自分の遊民としての生活、結婚しない独身生活、しかも芸者遊びまでを正当化したのだ。このような代助の現在の在り方は、望まない相手と政略結婚をしていながらも金で自由に女が買える長井家が望む次男としての在り方と正確に一致する。その意味で代助の論理は、一見資本階級を批判しているように見えながらも、実は資本階級を正当化しつつある。このような代助の現在の在り方が、東京に戻ってきた人妻である平岡三千代に

よってどのように崩壊されるのかについて、本論文は詳しく考察した。

第三章で考察した『門』は、新聞連載小説としての技法的な成熟が垣間見られる小説であった。安重根による伊藤博文暗殺事件を報じた新聞の記事を読む、虚構の小説世界に登場した読者たちのそれぞれの反応が、新聞連載で『門』を読む読者に、伊藤博文暗殺事件の報道記事のみならず、関東州の旅順で開かれた安重根の公判を報じた電報記事における安重根の声を想起させてコンテクストとして活性化させる。本論文では小森陽一の先行論を踏まえ、『門』の連載が始まるわずか二週間前に安重根の公判の全過程が紙面に報じられていることを指摘した。すなわち新聞連載で『門』を読む読者の意識には、安重根の声で伊藤博文を暗殺した理由を一目瞭然に語られた記憶が深く刻み込まれていると言わざるを得ない。従って伊藤博文暗殺の号外が登場する『門』を読む新聞読者は、「どうして、まあ殺されたでせう」という御米の問い掛け応答する形で、安重根が語った暗殺の理由に当たる韓国植民地化の全過程を想起するか、それとも御米の問い掛けをはぐらかした宗助に倣って過去の歴史を忘却するかという、記憶の政治学の前に立たされるのだ。

伊藤暗殺の報道をめぐる記憶の政治学は、『門』における宗助と御米夫婦の歴史における記憶と忘却の問題に繋がっている。御米の問い掛けをはぐらかす宗助は、日常における御米が過去についての悲劇的な記憶を持っているにも拘わらず、過去を想起して語り合いながら記憶を書き換えることを拒んでいる。それは、宗助自身が過去と対面することを拒んでいるからでもあるが、妻である御米の声が宗助に抑圧されると同時に、地の文の記述においても抑圧されているため、その夫である宗助の意識の変更が難しいのが夫婦の現状である。しかし、声を抑圧されている御米が行っている交換行為が巻き起こす一連の事態は、悉く宗助の記憶を想起させ、とどのつまりは宗助の意識を変更させ、記憶を書き換える可能性を開いている。

第四章では、『彼岸過迄』について考察した。「高等遊民」を名乗り「さう云ふ階級の代表者らしい」松本と、松本を追う「探偵」の役割を演じる敬太郎が登場する『彼岸過迄』は、「高等遊民」を「危険人物」又は「注意人物」と見なして「探偵」を使って監視させていた大逆事件後における社会状況と言説の布置を読者に思い起こさせるように仕掛けられている。だが、短編連載の形式を取る『彼岸過迄』で「探偵」の役割を演じた敬太郎は、須永の問題が主題化されるにつれて背景に退き、読者の代わりに話を聞いて回るだけの役割に止まる。須永の問題が浮き彫りにするのは、大逆事件で犠牲となった社会主義者たちが提起した「階級問題」である。まず、須永家の小間使であったが、須永の父に襲われて妊娠したはずの須永の生母お弓は、産んだばかりの子供を奪われて松本家から捨てられて死んでしまう。次に、須永は「貴女<sup>レディー</sup>」として振る舞う松本家の女千代子を、「階級制度の厳重な封建の代に生まれた様に」振る舞う下女のお作に対峙させていた。

一方、自分の出生の問題について悩んでいる須永は、母の期待を裏切る形で松本と同じような「高等遊民」としての生を選び取ろうとしているように見える。だが、松本家は自分の父と田口に二人の娘を政略的に嫁がせて先代の財産を利子を生む資産として保存させたことや、松本の世俗に超然とした「高等遊民」として営みが、利子あるからこそ可能だということを見通している須永は、松本を「偽物質物」だと批判する。『彼岸過迄』では、松本を含んだ「紳士」「階級」の経済的な基盤は、日清戦争の賠償金とそれに基づいた日清戦後経営、そして後の帝

国主義を通じて形成されたものであることが浮き彫りにされている。その意味で須永の松本批判は、大日本帝国の帝国主義と植民地領有から得られた財産の正当性を問いただしていると論じた。

第五章から第七章までは『心』について考察した。単行小説ではなく新聞連載小説として『心』を読む場合、読者は同紙面で報道記事を読んだ記憶を通じて、ある国民的な規模における記憶に接続させられる。『心』の連載が開始される直前、新聞紙面には昭憲皇太后の「御不例」と「崩御」が報じられた。昭憲皇太后が明治天皇の妻である以上、新聞の読者は明治天皇の「御不例」「崩御」「御大葬」を想起せずにはいられない。皇太后の「御大葬」は『心』の連載中に行われた。『心』は「御大葬」報道によって休載されたが、「御大葬」が終わって間もない『心』連載三九回には、「明治天皇の御病気の報知」がある「新聞紙」が登場して、昭憲皇太后の「御不例」「崩御」「御大葬」の報道記事を読んできた読者が二年前における明治天皇のそれらを一気に想起するように仕掛けられているのである。

第五章では、新聞連載の『心』が読者に想起させる国民的な規模の記憶が、小説の言説の中でいかに組織化されているのかを検討した。まず、一介の田舎の老人に過ぎない「私」という青年の父が、天皇と同じ「尿毒症」を病んでいることが、すでに「不敬」に当たるという渡辺直巳の指摘を踏まえ、「私」が記述している父の病状が明治天皇の最後の「御容態書」の内容を模倣していることを指摘した。その意味で、天皇の自然的身体が臣民の身体と何の変わりもない生身の身体であることを読者の意識に刻み付ける『心』は、「御不例」「崩御」「御大葬」の過程における新聞メディアとその読者である国民共同体の高揚感によって神聖化された、天皇の政治的身体に亀裂を走らせるものであると言える。次に、そのような高揚感を巻き起こす重要な契機となった「御大葬」当日における乃木希典の殉死の報道記事を読んだ、小説内部の読者である「私」の父と「先生」の反応に注目した。田舎と東京にいる二人の家父長は、それぞれ乃木に自分の死を同一化させようとする。しかし「私」が書き記している手記の中には、「先生」の自殺を「厭世」自殺として読み解く解釈枠組が設けられているし、すでに「先生」の遺書にも同様な解釈枠組があることを確かめた。乃木希典の殉死を報じた当時の新聞言説には、乃木の自殺が、藤村操以来の煩悶青年たちの厭世自殺を促す可能性を恐れる不安がふんだんに含まれている。その意味で、「先生」の自殺が「厭世」自殺として描かれている『心』は、国民共同体の高揚感をもたらすものとして乃木の殉死に賛嘆した当時の言説が密かに抱いていた、国民共同体の裂け目からくる不安を象っていたと言える。

第六章では、「上」「中」「下」の三部構成を取った単行本とは違い、新聞連載の『心』がその全体が副題である「先生の遺書」で括られた手記の形式を取っていることに注目した。実はそれは、当初短編連作を予告していた作者夏目漱石が、次の短編を書かなかったという契約違反によるものである。本章で注目したのは、すべての読書行為が終了されるはずの『心』の終わりで明らかにされるこの契約違反から、改めて始まる記憶の想起による読書行為である。次の短編の不在によって「先生の遺書」だけの読者となる『心』の読者は、読んだばかりの「先生」の遺書における解釈枠組によって「静」の死を想定しながらも、その遺書を書き写しながら引用した「先生の遺書」の書き手「私」によって組み込まれた手記部分における解釈枠組を想起することで、両者を競合させることになる。

しかし、その生きている「静」の〈今〉が、読者に確かめられるといえるためには、ぜひとも「静」策略家説を乗り越えなければならない。本論文では、真面目な発話による「先生」の言語ゲームと、「笑ひ」と「笑談」を中心にする「静」の言語ゲームを拮抗させながら、「笑ひ」と「笑談」が「静」が策略家である根拠であると述べる先行研究史を、遺書と手記の部分をそれぞれ比較分析しながら再検討した。次に、これまた「静」が策略家である根拠として取り上げられている、書き手「私」が「静」を「批評的」にみている理由について分析した。すでに「私」の手記が「静」に向けられて書かれているという指摘はあるが、さらに本論文では、「先生」の遺書を読み終えた「静」が「私」との新たな言語ゲームを形成させている痕跡を読み取り、「私」の「静」に対する批評は、〈今〉の二人の間に新しく芽生えてきた言語ゲームの規則が共有されたからこそ可能であることを証明した。

第七章では、『心』における「未亡人」に関わる主題系を考察した。新聞連載『心』は、明治天皇の死と乃木希典の殉死を想起させる小説として理解されてきたものの、小説の中で手記「先生の遺書」を執筆する書き手「私」は、「先生」と田舎の父が「おれが死んだら」という同じ科白を発したことをわざわざ断っている。しかも「先生」の名前を断っていない「私」は、夫たちが死んでから「未亡人」として残される二人の女性である「静」と「光」の固有名をわざわざ書き記して置く。手記の中に引用される「先生」の遺書の部分を含めて「先生の遺書」の中には二人の「未亡人」の名前以外に一切の固有名が公開されない。そのうえ「私」は、「静」の母こと「奥さん」を「未亡人」と呼ぶ「先生」の書き方に倣わず、「静」のことを「未亡人」とは呼ばず「奥さん」と呼ぶ。すなわち「私」が「先生」を反復せずに差異化するのとは、「静」を「夫と共に死ぬべきであるのに、未だ死なない人」を意味する「未亡人」と見なさないことにあるのだ。『心』が、あたかも天皇制国家の価値観を肯定する物語であるかのように読まれてきたのは周知の事実である。本章では、「私」が自覚的に書き記した「未亡人」をめぐる主題系が、同紙面の報道記事で昭憲皇太后の死をめぐる情報を読んだ読者の意識と連動しながら、明治天皇の死から始まる臣下としての男たちの死の連載という主題系を脅かしつつあることを明らかにした。病死した明治天皇の病名である「尿毒症」が、「未亡人」の主題系の頂点に立つ「静」の母こと「奥さん」を死なせた病名であることがそれを端的に物語る。要するに、天皇と皇后の自然的身体における病の起源には、死んだ「未亡人」の身体を位置させている『心』は、昭憲皇太后の「御大葬」をきっかけに明治天皇の「御不例」「崩御」「御大葬」を想起する読者共同体に向けて、天皇が亡き「未亡人」のように自然的身体を持つ人間でしかなかったことを改めて喚起しているのである。

以上のように本論文は、漱石の新聞連載小説を読む読者が同じ紙面で読んだはずの報道記事を取り上げ、それぞれの小説の解釈を行なった。従来、漱石の新聞連載小説における報道記事への言及は、意味作用におけるノイズのように取り扱われる場合が多々あった。しかし、以上の考察を通じて、報道記事を言及する漱石の新聞連載小説が、新聞紙面における他の報道記事に言及しながら自らを組織するメタ新聞小説の構造を持っていることが明らかになった。漱石の小説は、数か月または数年前に読者が新聞の報道を通じて体験した同時代の歴史的な記憶を召喚して言及することで、報道記事によって体験され意味づけられたはずの読者の意識を想起させ、物語を展開させて行く。



だが、本論でみてきたように、それらの報道言説は、その読者共同体とほぼ重なる国民共同体の同一性を読者が新聞を読む日々の行いの中で成立させる行為遂行性を持つ。その意味で読者の歴史的な記憶を召喚する漱石の新聞連載小説の仕掛けは、国民共同体の同一性が形成された起源を改めて問いたさることになる。本論文で取り上げた塩原事件、日糖事件、伊藤博文暗殺事件、大逆事件、明治天皇の崩御といった歴史的な出来事について、新聞メディアは、女性、植民地、社会主義を他者として固定化して排除する言説を生産しながら、男性、資本、天皇制国家のイデオロギーを再生産する装置として機能した。しかし同紙面における漱石の新聞連載小説は、それらの出来事を報道記事を読みながら形成された読者の記憶を想起させたうえで、その記憶に語り掛ける装置として機能していたのである。

